

氏名	フク トミ ショウ コ 福 富 祥 子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第148号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉演奏行為における心身の調和～演奏家のための身体法「ディスポキネーシス」の手法による弦楽器奏法への取り組み～

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授（音楽学部）	河野文昭
(副査)	〃	〃（〃）	清水高師
(〃)	〃	〃（〃）	土田英三郎
(〃)	〃	准教授（〃）	山崎伸子
(〃)	〃	非常勤講師（保健管理センター）	大江隆史
(〃)	国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所	運動機能系障害研究部長	中澤公孝

(論文内容の要旨)

本論文は、演奏行為における心身の調和の構築に向けた新たな取り組みの報告である。

音楽作品に触れ、体の中から沸き上がった音楽的なイメージを外へ向けて自由に表現できることは大きな喜びである。しかし「こう弾きたいとわかっているのに、指はそうしてくれない」あるいは「舞台上で自分の本来の力が発揮できない」というような不自由感を、演奏家ならば一度は経験したことがあるのではないだろうか。多くの演奏家が、ラクに弾けてしかも良い演奏ができるはずだと思いながら、どうすればそれが実現できるかがわからぬまま悩み、慢性的なフラストレーションを感じている。本論文の目的は、このような状況を打破し、動きや表現の不調和を身体的な観点から解決するための新たな可能性を提示することにある。

そのために本論文では、現在ドイツを中心に広がりを見せている演奏家のための身体法「ディスポキネーシス」を取り上げて研究テーマとした。ディスポキネーシスは私がベルリン芸術大学留学中に出会ったものであり、理学療法を土台として、全ての楽器（声楽・指揮を含む）演奏を対象とする身体法である。

ディスポキネーシスが演奏家の不調和にどのように対応するものなのか、その手法をリサーチするために、私は2005年～2008年にかけてドイツで開催された資格コース「ディスポキネーシス教師養成コース」に参加し、データ収集を行った。それと並行してディスポキネーシスの手法を弦楽器演奏に応用するために、本学学生（一部、卒業生）を対象としたレッスン試行を度々行った。本論文はこれらの調査に基づいた研究である。

演奏行為は能動的な対話の場であり、舞台上で演奏するために相応しい能動的な姿勢と動きの感覚を獲得することは不可欠である。そこで第1章ではまず、ディスポキネーシスにおける能動的な姿勢と動きの理論を概観し、中でも「ready to go」と呼ばれる身体感覚の重要性を示した。続く第2章では、能動的な姿勢と動きの誘発を目指してディスポキネーシスで用いられる様々な練習法を紹介し、学習者の内的イメージやモチベーションを刺激して自発的な動きを導き出す、というディスポキネーシス独自の手法を概観した。また特にチェロを中心とした弦楽器の基本奏法に関して、ディスポキネーシスの基本理論がどのように応用されているのか、重要なポイントに絞って紹介した。そして本論文の主要部であ

る第3章では、本学学生を対象者として行ったディスポキネーシス試行の詳細な経過を報告し、最終章でそれをまとめて考察を行った。ディスポキネーシスは全ての楽器に対応したものだが、本論では、特にチェロを中心とした弦楽器演奏に対する試みに焦点を合わせることで、弦楽器演奏における問題をより深く掘り下げることができた。

試行の対象とした被験者から頻繁に訴えられた問題点は、力を抜きたいが脱力すると演奏できない、といった演奏行為全般における身体のあり方を問うものから、音程が正確に取れない、速いトリルやヴィブラートがぎこちない、音色の細やかなニュアンスが表現できない、といった技術的な問題、さらに演奏行為にあたりどのように自分を動機づければよいのか、といった心理的な問題まで、多岐に渡るものであった。これらの具体的な問題の一つ一つに対して「どのように感じているのか」「どのようにイメージしているか」という問いかけと観察に基づいて、新たな可能性を探った。

これらの試行からは、調和を妨げている問題の根本原因に、習慣化された姿勢や動きの「癖」があること、しかしそれは身体の問題というよりは、行為に先立つ内的イメージ、またしばしば演奏者の「…なければならぬ」という思いにあるということが、明らかになった。そして、新たな身体感覚の獲得に向けて、身体的な安定感の構築が動きの自由度を上げること、目的とする音楽のイメージに合致する感覚イメージを見つけることで表現が立ち現れることなどが明らかになった。

「どのように感じているのか」という身体感覚に関する問いかけは、学習者に「どのような経験をしているのか」ということを認識させ、次に生み出す行為を準備するための重要な情報となった。これは、練習が結果としての成果のみを求める場でなく新たなイメージを創造していく過程である、ということをも裏付けるものとなった。そしてそれに伴う自己観察能力が、演奏行為を真に創造的なものにするための一つの重要な前提となることが結論づけられた。

(総合審査結果の要旨)

演奏家のための身体法「ディスポキネーシス」という日本ではまだ未紹介の手法について、実践的な試行報告を通してその概念や方法、そしてその特徴がよく説明された論文である。

ドイツ、エッセンでの教師養成コースに通い、その後ディスポキネーシスの教師（ディスポキネーター）の資格を取り、その立場で試行を行ったことが詳細に報告されているが、そのために関連する医学の分野に対しての知識も深めたことは、単に興味本位のレベルを越えており驚嘆させられる。

博士在籍中に行われた2度のリサイタル及び学位審査会での演奏は、会を重ねるごとに彼女が抱えていた問題点が解決されてゆき、「ディスポキネーシス」研究の成果が彼女自身の演奏に大きく影響を与えたことを感じさせるものであった。学位審査会での演奏には、より高い完成度が望まれたが、「ディスポキネーシス」が身体的な部分を理解することにより、演奏家の体と心、あるいは精神との「調和」を目指すメソッドであること、をよく示した演奏であったことは大いに評価できた。

各審査員の所見にもあるとおり、演奏系の博士として相応しい成果を示しただけでなく、今後このメソッドの先駆者として、その紹介と普及に大きな期待が持てることをも高く評価し、審査の結果を合格とし、成績を秀とした。